

NPO森を再生する会会報

<http://www.katch.ne.jp/~kamiyaf18/>

ハイライト:

- 本物の森づくり
- 秋の植樹祭
- 原生林を歩く

潜在自然植生と森づくり	1
秋の植樹祭ご案内	2~

潜在自然植生と森づくり

潜在自然植生とは、あらゆる人間活動を停止しその影響が全く生態系に対してなかったとき、最終的に現在の自然環境の総和がどうなっているか、自然植生を支持する潜在能力を持っているか、現在の植生の現地調査によって理論的に考察しうる自然植生の事である。

人間が手を入れなかった場所として、鎮守の森があり、潜在自然植生を見ることができる。それは、日本の神道が自然崇拜に依拠し、樹木をはじめ、自然物にはすべて神が宿ると信じ、むやみに木を切ることはしなかったからである。

ところが、近年、自然崇拜が薄れ、技術の発展と共に道具が出回ることも相まって、神社、史跡の樹木がいとも簡単に切られるという現象が起こっている。私の郷土でも、古墳の表層が掃除と称して下草が刈られ、落ち葉がきれいに掻き出される。その結果、斜面の土は、雨と共に洗い流され、古墳が崩れていく。落ち葉や下草による覆いがなくなったから当然である。今度は、草を生やさなくてはと、太陽光を入れるために樹木を切る。雨が表土を直撃し、一層、浸食は進む。地元の文化財保存会のメンバーは、この流亡を止めるため、工事を市・県・国へ陳情するという。

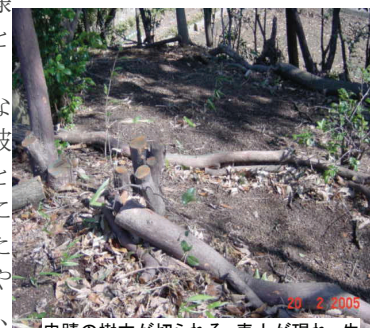
どんな工事をするというのだろうか？草を刈ら

ずに、落ち葉も大切にそのままにしておけばこうならなかったのに。人間が手を付けてはいけない部分があると言うことに気づかない。人間が自然を破壊していく様を見るようで何ともやりきれない。

こうして、身近なところにも森林破壊現象を見ることができる。落ち葉に困るからと植えた街路樹をむやみやたらと切る。神社、史跡など人が入り込まなかったところ

に掃除と称して、落ち葉をかきとり、表土を露にし、土の流亡を促進する。自然は一度失うと回復には、予想以上の時間がかかる。だから潜在自然植生を目の当たりにすることのできる鎮守の森を大切に守り育てたいものです。

10月22日、秋の植樹祭には、段戸裏谷原生林を生態学者藤原一絵先生と一緒に歩き、本物の森について理解を深めます。ぜひ自分の目で見て、匂いを嗅ぎ、手で触れ、肌で感じ取って欲しいと思います。



史跡の樹木が切られる。表土が現れ、生態系も崩れる。

生態学者 藤原一絵先生プロフィール

1944年(昭和19年)、東京生まれ

横浜国立大学環境科学研究センター教授を経て2001年4月より横浜国立大学大学院環境情報研究教授、理学博士、卒業論文の尾瀬ヶ原の植生の人為的影響による植生変化の調査および植生図化から始め、1969年フランス政府の給費研究員としてポタ山の植生研究、ドイツ応用植生研究所において湿原植生の体系化を行う。帰国後日本の常緑広葉樹林の体系化を行うとともに日本全国、熱帯アジア、アフリカ、アマゾンやアメリ

カ東海岸の植生比較を行った。現在中国、タイ、東ロシアの植生図化を中心に、植生調査比較および環境保全林回復創造を各地で実験植栽を行っている。又日本の植生と世界の植生の創造・回復に取り組んでいる。国際植生学会および国際生態学会評議委員、2005年から国際生態学会副会長。

主要図書

「湿原植物」(日本交通公社)、「環境問題を考える」(潮出版)